

大崎ひまわり訪問看護ステーション

症 例 概 要 利用者氏名：10代 男性

利用期間 ：平成 29年 4月 ～

経 過：平成27年11月、閉塞性水頭症で発症した非定型奇形腫様/ラブドイド腫瘍。同年12月、腫瘍亜摘出術施行。オンマヤリザーバー、VPシャント増設し、平成29年まで放射線照射及び化学療法実施。右側室内に播種残存あるが、現在は経過観察中。

内 容

平成26年8月、正常分娩にて出生。順調に成長していましたが、1歳の誕生日を迎えた後に非定型奇形腫様/ラブドイド腫瘍を発症。

約2年に渡る治療の末、状態は安定しましたが、後遺症により発達は新生児レベルまで後退。そのため、発達支援を目標に大崎ひまわりでのリハビリ介入を開始しました。介入を通して緩やかに発達は進み、3歳で歩行器を用いての歩行が可能になりましたが、父の転勤のため仙台に転居することに。そこで、仙台ひまわりに支援のバトンを託し、仙台でのリハビリ介入が開始となりました。

長年の介入の結果、7歳で独り歩きが可能に。二人の弟も生まれ、賑やかに生活していましたが、10歳を迎える年に父の転勤に合わせて再び大崎に転居。特殊な脳室腹腔シャント管理について、看護師が仙台ひまわりから詳細な申し送りを受け、支援のバトンを繋ぎました。その頃には小走りが可能なまで成長していましたが、すでに弟たちは自転車を乗り回しており、それをなんとか走って追いかけている状態でした。そこで、ご家族の強い希望もあり、自転車に乗ることを目標とした介入を開始することになりました。

10歳の誕生日プレゼントとして自転車を贈られましたが、後遺症による足部の障害のため上手くペダルを漕ぐことが出来ませんでした。感覚過敏のため人に身体を触れられることを嫌がっていましたが、ペダルを漕ぐ足関節の可動域を得るため、友達の力を借りながら地道な関節可動域訓練に取り組みました。また、足関節の機能をより高めるため、大学病院の義肢装具士と連携し、最適な短下肢装具の作成を図りました。

その後は、リハビリ介入時だけでなく、ご家族とご本人の多大な努力の結果、弟たちに負けないスピードで、満面の笑みを溢しながら自転車を漕ぐことが出来るようになりました。

今後も、ご家族とご本人のチャレンジを陰ながら支え、キラキラした毎日を送れるように支援を行っていきます。

大崎Ns：状態観察・NGチューブ管理・療養相談 大崎PT：体力向上のためのリハ 大崎ST：経口摂取援助・コミュニケーションサポート

仙台Ns：脳室腹膜シャント管理・療育状況管理・育児相談・体調管理 仙台PT：手指巧緻性の向上・歩行訓練・バランス訓練 仙台ST：コミュニケーション能力の向上

大崎Ns：脳室腹膜シャント管理 大崎PT：関節可動訓練・装具管理・運動能力向上のリハ・家族相談